

○委員以外の議員(はたともこ君) 生活の党のはたともこでございます。

本日は、厚生労働委員長武内則男先生、また理事の皆様、委員各位の皆様の御配慮により、私の委員外質疑をお認めいただきまして、誠にありがとうございます。

今回の予防接種法の一部を改正する法律案では、定期の予防接種の対象疾病にHib感染症、小児用肺炎球菌感染症及びヒトパピローマウイルス感染症を追加することとされています。しかし、この三つの疾病に係るワクチンのうち、ヒトパピローマウイルスワクチン、すなわちHPVワクチンについては、我が国では欧米に比較してワクチンで予防できるウイルスの型、16型、18型を持つ者の割合が低く、ワクチンの有効性の持続期間も明らかではありません。

HPVワクチンで予防の可能性のあるのは、女性千人のうち〇・〇四人、すなわち〇・〇〇四%にしからず、たとえHPVに感染しても九九・九%以上は子宮頸がんにはならないという試算もございます。HPVは、たとえ感染したとしても九〇%以上は自然排出されます。むしろ、定期的な検診により持続感染や前がん病変の初期段階である軽度異形成を発見することが重要です。軽度異形成の九〇%は自然治癒しますので、残りの一〇%について経過観察の上、中等度、高度異形成への進展の段階で治療を行うことで大部分が治癒します。

一方、HPVワクチンの副反応の頻度についてですが、インフルエンザワクチンの十倍との報道が流布されていますが、実際には、お手元の資料にあるように、インフルエンザワクチンの、サーバリックスは三十八倍、ガーダシルは二十六倍、そのうち重篤な副反応は、インフルエンザワクチンの、サーバリックスは五十二倍、ガーダシルは二十四倍と明らかに多く報告されています。このようなワクチンを国が接種を勧奨する定期の予防接種に位置付けることが、現時点で適当であると言えるでしょうか。ヒトパピローマウイルス感染症の定期接種化は時期尚早であり、慎重に対応する必要があると言わざるを得ません。

子宮頸がん等ワクチン接種緊急促進事業をHPVワクチン接種助成事業として継続し、任意接種として、これまでと変わらない被接種者の健康被害に対する救済額や接種費用に関する公費の負担割合を維持しつつ、有効性、安全性等について更に検証を進める必要があると考えます。また、現在、独立行政法人医薬品医療機器総合機構による健康被害救済の対象となっていない筋肉注射による失神、意識喪失などの接種行為による健康被害も救済対象とすることを検討する必要があります。もちろん、正しい性知識の普及啓発と定期検診の勧奨が政府、自治体の重要な任務です。

このような認識の下、本日は厚生労働省に事実関係、ファクトについて質問いたします。

今回の法改正に際して、子宮頸がん予防ワクチンという名称がHPVワクチンという名称に変更されました。これは、子宮頸がん予防ワクチンという名称が必ずしも適切でないということだと思えます。

国立感染症研究所、平成二十二年七月七日版、HPVワクチンに関するファクトシートに沿って質問をいたします。

厚生労働省、性的活動を行う女性の五〇%以上が生涯で一度はHPVに感染すると推定されているということによろしいですか。

○政府参考人(矢島鉄也君) 御指摘のとおり、国立感染症研究所が作成しましたファクトシートの中で、海外における状況を調べましたところ、御指摘の場合には、女性の五〇%以上が一生に一度はHPVに感染すると推定されているという記述がございます。

○委員以外の議員(はたともこ君) 昨日の厚生労働省の説明では、日本人の細胞診正常女性、つまり一般女性でHPV16型が検出される人の割合は一・〇%ということでしたが、事実ですか。

○政府参考人(矢島鉄也君) 16型と18型を合わせた形での御説明だったかと思いま

すが、HPV16型の感染の割合は0・5%、18型は0・2%という報告が、日本の研究者が海外の医学系雑誌に投稿したもののの中にございます。

○委員以外の議員(はたともこ君) 昨日の厚生労働省の説明では、日本人の細胞診正常女性、つまり一般女性でHPV18型が検出される人の割合は0・5%ということでしたが、事実ですか。

○政府参考人(矢島鉄也君) 御指摘のとおりでございます。

○委員以外の議員(はたともこ君) HPVに感染しても、90%以上は自然排出されるということによろしいですか。

○政府参考人(矢島鉄也君) 済みません。今、確認していたので、聞き逃してしまい、もう一度お願いします。済みません。

○委員以外の議員(はたともこ君) HPVに感染しても、90%以上は自然排出されるということによろしいですか。

○政府参考人(矢島鉄也君) 御指摘のとおりでございます。これは米国における三年間にわたる調査でのデータでございますけれども、90%が二年以内に検出されなくなつたという報告がされております。

○委員以外の議員(はたともこ君) HPVに持続感染し、前がん病変の軽度、中等度、高度異形成を経て子宮頸がんになる人の割合は、昨日、厚生労働省から0・1から0・5%だという説明を受けましたが、それによろしいですか。

○政府参考人(矢島鉄也君) ヒトパピローマウイルスの持続感染に至った者のうち子宮頸がんに至る割合については、様々な試算があります。そのため、子宮頸がんの前がん病変の段階で治療がなされる場合がある等の理由によりまして、確立した数値というものが、御説明のときにはあつたかもしれませんが、我々、公式に出すものについては確立した数値は得られていないというふうに理解をしております。

○委員以外の議員(はたともこ君) HPVに感染しても90%以上が自然排出する。残りの10%のうち、持続感染し、前がん病変の初期段階である軽度異形成になつたとしても、そのうちの90%は自然治癒するということによろしいですか。

○政府参考人(矢島鉄也君) 今の御指摘の数値は、イギリスの医学雑誌ランセットによる二〇〇四年の十一月のデータによりますと、若い女性の軽度異形成の90%が三年以内に消失するという報告がございます。

○委員以外の議員(はたともこ君) 軽度異形成の段階では経過観察を行い、中等度、高度への進展の段階で治療をすれば大部分は治癒するということによろしいですか。

○政府参考人(矢島鉄也君) その程度にもよるんですけれども、予防接種部会のワクチン評価に関する小委員会のチームの報告によりますと、先ほど、CIN2と呼ばれる中等度異形成に関しましては、経過観察を見る場合ですとか冷凍凝固術ですとかレーザー蒸散法によります治療が行われることがあります。そういうふうな場合については一定の見解がなされていませぬが、その後の、中等度異形成の後、CIN3の段階になりますけれども、高度異形成ですとか上皮内がんに対応する段階では病変部を取り除く子宮頸部円錐切除術が行われまして、これの適切な治療が行われた場合には治癒率はおおむね100%であるというふうに日本産婦人科腫瘍学会のガイドラインでは示されております。

○委員以外の議員(はたともこ君) お手元の資料は、厚生労働省から提供された本年三月十一日、厚生労働省開催の副反応検討会資料を基に作成したものです。

一般にはHPVワクチンの副反応の頻度はインフルエンザワクチンの十倍と言われておりますが、それは事実ではなく、実際には、インフルエンザワクチンのサーバリックスが三十八倍、ガーダシルが二十六倍、そのうち重篤な副反応は、インフルエンザワクチンのサーバリックスが五十二倍、ガーダシルが二十四倍ということによろしいですね。

○政府参考人(矢島鉄也君) 今の倍率につきましては、いろいろと対象年齢が異なることからその報告率に違いが生じておりますけれども、三月十一日に開催しました副反

応検討会の資料におきましては、子宮頸がん予防ワクチンが発売開始から昨年末、十二月末までに八百三十万回接種されており、千九百二十六例の副反応の報告がありました。これは、百万回接種当たり約二百三十二例の報告率であります。

一方、インフルエンザワクチンにつきましては、昨年十月一日から同年十二月末まで約五千百万回接種がされておりまして、三百二十八例の副反応報告がありました。これは百万回接種当たり約六倍の報告率でありまして、御指摘の、そういう意味では報告率は約四十倍というふうになっております。

ですが、先ほど申しましたけれども、報告の対象ですとか因果関係の疑われる重篤な症例に限定されるということもございまして、対象年齢が異なることから、その報告率というんですか、そういうものについてはなかなか一緒に比べるとということは難しいというふうにご考えております。

○委員以外の議員(はたともこ君) 先ほどの質問をもう一度確認いたしますが、昨日の厚労省の説明では、日本人の細胞診正常女性、つまり一般女性でHPV16型が検出される人の割合は一・〇%ということでしたが、事実ですか。

○委員長(武内則男君) 時間ですので、簡潔に願います。

○政府参考人(矢島鉄也君) これは様々な研究の中の一つにそういう報告があるということは聞いております。

○委員長(武内則男君) はたともこさん、時間が来ていますので、まとめてください。

○委員以外の議員(はたともこ君) では、まとめます。

現時点で、HPVに感染した女性の〇・一%以下しかがん予防に有効の可能性がなく、すなわちHPVに感染した女性の九九・九%以上に効果あるいは必要性がないワクチンを全ての少女に対して義務的に接種させるということは、重篤な……

○委員長(武内則男君) 時間が過ぎていきますので、おまとめください。

○委員以外の議員(はたともこ君) 副反応がインフルエンザワクチンの五十二倍、二十四倍もあることから私は非常に問題だと思います。医学の更なる進歩によって真に有効な子宮頸がん予防が実現することを願って、私の質問を終わります。

皆さん、本当にありがとうございました。